國	佛國	獨國	伊國	備考
黨内閣すら之を放棄せざるのみか、却て益々其實行に力を注ぎ、今や空軍勢力八十九中隊の整備を目標として擴張中である。	戰後財政頗る窮乏せるに拘らず、東隣諸邦に獨逸に對し空中防禦の安全を確保し、併て對英政策の後援として依然尨大なる空軍を整備し、鋭意其進歩發達に努力してゐる。而して英、伊、兩國の獨立空軍制に倣ひ航空省獨立の必要を高唱し、幾多研究、論議の後遂に一九二八年十月航空省を設け空軍は獨立したが、陸海軍航空は從來の如く陸海軍の要求に依り專屬的に之と協同する如く定めてある、又一九三一年末タルヂュー内閣の時、一旦陸海空の三軍を統一する國防省成立したが、幾何もなく復三軍に分れた。	獨逸は峻嚴なる講和條約に依り軍事航空を禁止せられあり爲、鋭意民間航空の發達に努力し、新式航空機の研究、民用航空の組織等に關し畫策すると共に、國内は勿論中歐、蘇聯邦並北歐の外、更に遠く極東並南米地方に向ひ航空路の開拓に努力してゐる、而して獨逸が其周隣諸國に有力なる航空工場を保持し、竊に自國航空工業發展の爲其勢力を扶植しあるは注目を要する所である。殊に飛行船の發達、進歩は遂に一九二九年世界週航の成功を齎した。	現首相「ムッソリーニ」政權を得るや、平素の抱負に基き空軍の大擴張を行はんと欲し、自ら航空高等委員會議長となり、一九二三年四月擴張案を議決し、軍事航空長官及軍事外航空長官を共に航空高等委員會の隷下に屬し次で一九二五年空軍を獨立せしめ、一九三〇年迄に飛行一八二中隊、氣球八中隊、飛行船六中隊を包含すべき擴張計畫を立案し、其實行に著手したが、最近更に新空軍編制を下記の如く改正した。
	約三千機 （航空省所屬のもの）		約五千百機 （空軍省所屬のもの）	
	偵察 七一 戰闘 三〇 爆撃 三二 海軍用 二三 氣球中隊 一八 一五六中隊		現在數（一九三〇年末） 偵察 三六 戰闘 二八 爆撃 三一 機種不明 一四 練習 一四 一二三中隊 氣球 二中隊 新空軍編制、 主力軍 四二大隊 陸軍協同隊 一五大隊 海軍協同隊 四聯隊 植民地は別に定む	一、波蘭は世界大戰後の新興國であるが、化學戰に由緒深き蘇聯邦と獨國との間に其研究、教育も亦眞摯にして、特に國民一般に對する瓦斯防護教育に於て見るべ イ 軍部の施設 陸軍省兵器局内化學戰課―軍用化學研究所―化學戰學校 ―瓦斯教導中隊 ロ 民間施設 航空化學戰防護協會 會員約四十萬、國民瓦斯防護教育用車輛（鐵道用）約一〇輛及同自動車數十輛
	空軍費 約十八億二千萬法 （一九三一―三二年度）	民用航空豫算 約四千三百萬麻 （一九三一―三二年度）	約七億五千二百萬利 （一九三一―三二年度）	

兵器整備一覽

空				
隊數	偵察 一二 戰闘 一一 爆撃 四 氣球中隊 二	偵察 戰闘 爆撃（略） 攻撃其他 二四二中隊 中隊、航空船三中	偵察 一四 驅逐 一四 攻撃 四 爆撃 一〇 學校（教導中隊） 一一 飛行船中隊 二 氣球中隊 二 機動務中隊 一六 船動務中隊 一 に偵察飛行中隊一	
豫算		不詳	約二千七百萬弗 （一九三三—三四年度）	
高射砲				正規軍高射砲二大隊（六中隊） 平時高射砲一四八門 大隊及對空照明一大隊より成る正規軍防空旅團二箇を
戰車及機械化部隊	一聯隊と一隊 戰車隊 二	旅團 約三個 獨立聯隊 約五箇 獨立大隊 十數箇 戰車聯隊 約四 獨立戰車大隊 約五 獨立戰車中隊 若干 右の外機械化旅團（聯隊）約四を有す 右戰車數 約二、〇〇〇輛 裝甲自動車 約八〇〇輛	七聯隊 約二〇〇門 外に高射機關銃 約五、〇〇〇 （本數字は豫備（兵器を含む））	（戰車四大隊
兵力及戰車數	列國の趨勢に鑑み防護に就き研究中	世界大戰の實驗に鑑み、一九二一年頃より將來の戰爭は航空機と化學兵器との進歩、發達如何に依りて決すべしとの說を唱道し、先づ軍隊內に毒瓦斯に關する研究及敎育機關を設け、又民間化學工業の發達を圖つた。此結果化學戰贊助會を建設し、後之を國防飛行化學協會に改編し、全國的に毒瓦斯の宣傳及化學工業の發達に努めてゐる。最近瓦斯及火焰攻撃に任ずる獨立化學部隊を設置し、屢〻防空演習を行ひ、戰時に於ける軍民協力並化學發達の必要を宣傳してゐる。	毒瓦斯の强大なる效力と戰時之を急造し得る特性、並條約不加入國との戰爭に想到するときは、毒瓦斯使用禁止の條約に信賴して、之が研究を忽せにするが如きは國防を危くするものなりとし、官民協力して之が研究に熱中しある狀は、遙に英、佛を凌駕してゐる。而して一九三二年度化學戰部豫算は百二十三萬弗に達してゐる。	重戰車中隊 一 中戰車中隊 一 輕戰車聯隊（八中隊） 一 獨立輕戰車中隊 七 計 一七中隊 右戰車數 豫備戰車を含し 約五〇〇輛 裝甲自動車中隊 二 （騎兵師團配屬） 其他を含し裝甲自動車數約二〇〇輛
化學兵器	科學研究所內に研究機關を設けてゐる。	軍部の施設 化學戰特別研究委員會 化學戰部 化學兵器研究所 六箇 化學兵器製造所 四箇 高等化學戰學校（將校敎育） 速成化學戰學校（下士以下敎育） 「モスクワ」化學聯隊 一箇 化學獨立大隊 約三箇 歩兵聯隊、騎兵師團（獨立騎兵旅團）には化學小隊を有してゐる。 民間施設 國防飛行化學協會 保健大臣は全國の醫師及獸醫に對し毒瓦斯の研究を命じてゐる。	化學戰部 評議委員會 技術委員會 本部 本部 技術部 「ドッウゲッエ」 醫務課 製造課 需品課 廠工 瓦斯第一聯隊（三中隊） 同第二聯隊（一中） 瓦斯中隊 二 （巴奈馬及比島各一） 瓦斯大隊（布哇一） 化學戰學校	化學戰研究は陸、海、空軍の共同

攻撃其他	二四二中隊、航空船三中隊	不詳	獨立聯隊 約五箇 獨立大隊 十數箇	(聯隊)約四を有す 右戰車數 約二、〇〇〇輛 裝甲自動車 約八〇〇輛	察 一四 逐 一四 擊 四 擊 一〇 校(教導中隊) 一一 行船中隊 二 船中隊 二 勤務中隊 一六 勤務中隊 一 察飛行中隊 一	約二千七百萬弗 (一九三三—三四年度)	七聯隊 約二〇〇門 外に高射機關銃 約五、〇〇〇 (本數字は豫備兵器を含む)
					重戰車中隊 一 中戰車中隊 一 輕戰車聯隊(八中隊) 一 獨立輕戰車中隊 七 計 一七中隊 右戰車數 豫備戰車を含し 約五〇〇輛 裝甲自動車中隊 二 (騎兵師團配屬) 其他を合し裝甲自動車數約二〇〇輛		

果化學戰贊助會を建設し、後之を國防飛行化學協會に改編し、全國的に毒瓦斯の宣傳及化學工業の發達に努めてゐる。

最近瓦斯及火焔攻擊に任ずる獨立化學部隊を設置し、屢防空演習を行ひ、戰時に於ける軍民協力並化學發達の必要を宣傳してゐる。

毒瓦斯の强大なる效力と戰時之を急造し得る特性、並條約不加入國との戰爭に想到するときは、毒瓦斯使用禁止の條約に信賴して、之が研究を忽せにするが如きは國防を危くするものなりとし、官民協力して之が研究に熱中しある狀は、遙に英、佛を凌駕してゐる。而して一九三二年度化學戰部豫算は百二十三萬弗に達してゐる。

旅團)には化學小隊を有してゐる。

民間施設

國防飛行化學協會

保健大臣は全國の醫師及獸醫に對し毒瓦斯の研究を命じてゐる。

化學戰部
- 評議委員會
- 技術委員會
- 本部
  - 本部
  - 技術部
  - 「ドッウヤッエ」
    - 醫務課
    - 製造課
    - 需品課
  - 工廠
  - 瓦斯第一聯隊(三中隊)
  - 同第二聯隊(一中)
  - 瓦斯中隊 二
  - (巴奈馬及比島各一)
  - 瓦斯大隊(布哇一)
  - 化學戰學校

察 七一 闘 三〇 撃 三二 用 二三 中隊 一八	空軍費 約十八億二千萬法 (一九三二—三三年度)	民 約四 三九一)	內 三九 外 二三 五中隊 八中隊	約一千七百四十萬磅 (一九三二—三三年度)	正規軍高射砲二大隊(六中隊) 平時高射砲一四八門 大隊對空照明一大隊 成る正規軍防空旅團二箇を編成してゐる。戰時は本國に飛行大隊を加へ、旅團を二乃至五旅團に編成し、防空師團を以て地方軍防空旅團に任ずしもある。 砲數不詳 三箇の旅團は一樣でない。平時は基幹部隊を有し、高射砲隊を乃至三隊より成り、戰時に於ては正規軍防空旅團と概ね同一の編制に移る。	條約に依り禁止せられ、要塞に	輕戰車聯隊(六中隊) 獨立戰車大隊 一〇 重、輕、三 植民地軍に約三中隊 右戰車數 約一、五〇〇輛 其他豫備戰車多數 裝甲自動車中隊 一九 と一小隊 車輛數 不詳	戰車四大隊(一二中隊) 裝甲自動車(一〇中隊) 戰車 二二〇輛 以上の外軍の機械化に伴ひ歩、騎兵用輕戰車數百を有す 裝甲自動車 約二〇〇輛	

一九一五年陸軍省內に軍用化學局を創設し、之に權威ある化學者數十名より成る委員を屬し、大戰間莫大なる需要に應じつつ休戰に至つた。戰後も將來戰の運命は瓦斯戰にあるべきことを確信し、陸軍省內に委員を設け之が研究を爲してゐる。目下は該委員に廣く民間權威者を網羅する爲其待遇法に關し審議中である。

而して財政の關係上空軍の整備に急にして、化學戰研究に對し多大の支出をなし得ない樣であるが、軍隊には曹く防毒面を支給し、瓦斯戰に關する訓練法の研究亦盛である。

將來戰に於て毒瓦斯戰を豫想し、之に對する研究は眞に緊張を極め、其期待する所は啻に大戰中の發明に係る防毒面浸透の程度を以て甘んずることなく、更に進んで各種劇烈なる種類の創案に努力してゐる。

一九一五年四月「カイザーウィルヘルム」研究所長「ハーバー」博士の提言を容れ、毒瓦斯を初めて戰場に用ひたるは著名の事實で、陸軍省內に化學部なる部局を創設し、民間の諸機關と協力し、卓

化學戰研究は陸、海、空軍の共同事業とし陸軍之を主宰し、左の研究施設がある。

一、調査部

化學戰に關する諸調査を行ふ

二、化學戰研究所

本部を倫敦に、實驗所を「ポルトン」及「サットンウオーク」に置く。

本部には軍人及學者を以て組織する化學戰委員會がある。

三、化學戰學校

隊附將校、下士に對し瓦斯防護法を教育する。

平和條約に從ひ特に化學兵器に關する施設はないが、元來化學工業、染料工業の發達著しいから、有事の際多量の毒瓦斯を製造することは容易である。

消防隊に瓦斯防護の教育を施し、

陸軍省
- 一、軍用化學局
  - 「リビルペーオ」「ーエ」所驗試
    - 研究部
    - 製造部
    - 教習所
    - 瓦斯教導隊
      - 防護法及攻撃的(用法ハ試驗研究及教育に任ず)
- 二、瓦斯防護材料監査部

防毒具の整備、檢査並關係將校、下士の教育に任ずる。

三、海軍は研究教育を陸軍に依托し、其防毒面は陸軍關係工場製のものを使用してゐる。

年末） 察 三六 闘 二八 撃 三一 種不明 一四 習 一四 二中隊 四二大隊 一五大隊 四聯隊 定む	約七億五千二百萬利 （一九三一年度）	野戰高射砲聯隊 五 義勇軍に屬する陣地高射砲司令部 二五 砲數 約一四〇門	聯隊（六大隊） 一 戰車 約一二〇輛 裝甲自動車 約五〇輛	大戰中化學兵器に關する施設殆ごなく、主として佛軍の援助に俟つたが、將來に殘されたる唯一の戰法は毒瓦斯戰なりとの議論近時漸く熾烈を加へ鋭意之が研究・施設に努力してゐる。
察 七一 闘 三〇 撃 三二 用 二三 中隊 一八	空軍費 約十八億二千萬法 （一九三二年度）	四聯隊（三二中隊）と三隊 砲數 一六〇門	輕戰車聯隊（六中隊） 獨立戰車大隊 重、一 輕、一 植民地軍に約三中隊 三 右戰車數 約一、五〇〇輛 其他豫備戰車多數 裝甲自動車中隊 一九 と一小隊 車輛數 不詳	一九一五年陸軍省内に軍用化學局を創設し、之に權威ある化學者數十名より成る委員を屬し、大戰間莫大なる需要に應じつつ休戰に至つた。戰後も將來戰の運命は瓦斯戰にあるべきことを確信し、陸軍省内に委員を設け之が研究を爲してゐる。目下は該委員に廣く民間權威者を網羅する爲其待遇法に關し審議中である。而して財政の關係上空軍の整備に急にして、化學戰研究に對し多大の支出をなし得ない樣であるが、軍隊には曾く防毒面を支給し、瓦斯戰に關する訓練法の研究亦盛である。
	民用航空豫算 約四千三百萬麻 （一九三一年度）	條約に依り禁止せられ、要塞にのみ二十八門を限り許容せらる。	條約に依り編成を禁止せられてゐる。	一九一五年四月「カイザーウィルヘルム」研究所長「ハーバー」博士の提言を容れ、毒瓦斯を初めて戰場に用ひたるは著名の事實で、陸軍省内に化學部なる部局を創設し、民間の諸機關と協力し、卓越せる化學能力を遺憾なく發揮し、以て列强をして瞠若たらしめたるは、今尚世人の印象に新なる所である。目下軍隊に於ては毒瓦斯防護法に關し訓練を怠らず、將校以下全員に防毒面を供給するのみならず、軍馬、軍用犬及軍用鳩に對しても防毒具を整備してゐる。
	萬磅 （度	各旅團砲數不詳 三箇 は一樣の編制でない が、平時基幹部隊を有し高射砲隊を乃至三中隊より成り、戰時に於ては正規車防空旅團と概ね同一の編制に移る。	戰車數百を有す 裝甲自動車 約二〇〇輛	烈なる種類の創案に努力してゐる。
				陸軍省 軍用化學局 研究部 製造部 教習所 瓦斯教導隊 （防護法及攻撃的研究及教育に任ず） （用法ハ試驗） リビルベーオ」ーエ試驗所 一、 二、瓦斯防護材料監査部 防毒具の整備、檢査並關係將校、下士の教育に任ずる。 三、海軍は研究教育を陸軍に依托し、其防毒面は陸軍關係工場製のものを使用してゐる。
				平和條約に從ひ特に化學兵器に關する施設はないが、元來化學工業、染料工業の發達著しいから、有事の際多量の毒瓦斯を製造することは容易である。 消防隊に瓦斯防護の教育を施し、時に之を秋季演習等に參加せしむる外、民間に防空協會があつて、防空演習には必ず瓦斯防護演習を行ひ、國民教育の指導に努めてゐるのは注目に値する。 又工場衞生の見地からも瓦斯防護は熱心に研究せられ、世界有數の防毒面工場がある。
				陸、海、空軍の化學戰研究機關を合し陸軍省の直轄とし、之に所要の實驗並教育機關等を配屬してゐる。 化學戰部 — 化學研究所 中央軍用 本部 化學課 療法課 技術課 實驗所 特別班 瓦斯教導隊 化學戰學校

深き關聯邦と獨國との間に介在し、常に隣國の脅威を受けてゐるので、化學戰に關する施設は、縱ひ其規模小なりと雖、克く完備し瓦斯防護教育に於て見るべきものがある。回國化學戰の施設概ね左の如くである。

學戰學校

教導中隊

約一〇輛及同自動車數十輛、毎年瓦斯防護週間を設け民衆教育の普及徹底に努めてゐる。

森村文庫

V;E49